

第 11 期宇治市生涯学習審議会 会議録

名 称	第 11 期宇治市生涯学習審議会 第 4 回審議会						
日 時	令和 5 年 11 月 30 日 (木) 午前 10 時～12 時						
場 所	宇治市生涯学習センター2階 一般研修室 (一部オンラインによる開催)						
出席者	委 員	○	石原 和彦	○	佐藤 翔	○	西山 正一
		○	内田 徹	○	畠 繁行	○	林 みその
		×	切明 友子	○	杉岡 秀紀	○	向山 ひろ子
		○	桑原 千幸	×	長積 仁	○	森川 知史
		○	小宮山 恭子	○	中本 裕也		
	事務局 ・ 市教委職員	○	福井 康晴 (教育部長)				
		○	上道 貴志 (教育部副部長)				
		○	林口 泰之 (教育支援センター長)				
		○	堀江 紀子 (教育支援課長)				
		○	前田 紘子 (生涯学習課長(兼)生涯学習センター所長)				
		○	野口 雅史 (生涯学習課副課長(兼)生涯学習センター主幹(兼)生涯学習係長)				
		○	松田 輝子 (生涯学習課事業係長(兼)生涯学習センター主査)				
		○	木口 悠 (生涯学習課生涯学習係主任)				
○	八木 美穂 (生涯学習課生涯学習係主任)						
傍聴者	0 名						

会議要旨は、下記のとおりである。

• 第 3 回審議会の会議録について

修正がないことを確認し、ホームページで公開する。→委員了承

1. 新任委員委嘱状交付

2. 報告事項

➤ 第 65 回全国社会教育研究大会宮崎大会について

(事務局)

令和 5 年 11 月 8 日～10 日、宮崎県において第 65 回全国社会教育研究大会宮崎大会が開催され、森川委員が全国社会教育委員連合表彰を受賞された。当日は森川委員が全体会・分科会に出席された。

(委員長)

参加された感想をお聞かせいただきたい。

(委員)

最初の基調講演では、宮崎県の歌人の方と万葉集の研究をされている先生とのインタビュー形式の対談だった。自分の生い立ちから、社会との繋がりを話された。中でも印象に残っているのは、自分が十分に知っている話でも初めて聞くように聞くことが一番大切だという話だった。

その後のシンポジウムでは、様々な立場の6人が話をされた。特に佐賀県でNPO法人を立ち上げられた方の話が印象的だった。現在は時間・空間・仲間の「3間」が足りず、居場所がないとの内容だった。特に子ども達は時間に追われているため、子どもを中心に集まれる「寄り道ステーション」を作り、たっぷりと時間をとって仲間と過ごせる場を提供しているとのことだった。その他、嫌いな人とどう関わるかとの話題もあり、おもしろい視点の問題提起だと感じた。

全国大会に行く一番の意義は、知らない土地を見る事だと思う。宮崎県知事が冒頭の挨拶で、土地が広大なのに人口が少ないため、非常に人柄が良い土地だと話された。例えば公共のバスに「回送です。すみません。」と表示される。そこにも人柄の良さが表れていると思うが、本当に謙虚な県民性で、県全体の空気が人を作っていると感じた。

(委員長)

多様な人々がいる地域で、市全体の生涯学習を考えること、また意見が異なる人々にどのような生涯学習ができるか、本日の議論の内容にも繋がる内容だったと思う。

➤ **社会教育活動実践交流フォーラム令和5年度京都府社会教育委員研究大会について**  
(事務局)

令和5年11月21日(火)向日市の永守重信市民会館にて、社会教育活動実践交流フォーラム 令和5年度京都府社会教育研究大会が開催された。「連携・協働で未来をつくる社会教育」～子どものために、地域のために～を研究主題に、滋賀県野洲市教育委員会委員長の高木和久氏を講師に迎えて「地域と学校の連携・協働が生み出す未来」を演題にした講演があった。当審議会からは、小宮山委員、林委員、西山委員、向山委員、森川委員にご参加いただいた。

(委員長)

当日ご参加いただいた方から感想をお聞かせいただきたい。

(委員)

講演はほぼコミュニティ・スクールの話で、時間の都合で生涯学習の話題があまり聞けなかったのが残念だった。たくさんの事例の一部を話しておられたが、それでも処理しきれないほど次々と事例が上がっていた。中でも、社会教育を生涯学習と言い換えるべきだとの話があったが、宇治市は先駆者だと嬉しい気持ちになった。

グループワークでは自分に何ができるかというテーマでの交流だった。組織をまとめる

のは得意だが仕掛けることが苦手という方の相談に対し、野外活動をされている方が子どもたち自身で何がしたいか考え、動くように仕掛けている話をされた。

最後、講師が社会教育委員は意見を出せる人を育てる役目があると話され、意見を言えるように自身も学ぶ必要があると感じた。

(委員)

子どものためのコミュニティ・スクールであるため、子どもが主体で活動できるようにすべきとの話だった。学校を応援するものではなく、子どもを応援するために、学校と地域で共通した目標を定めること、人に託す・任せることの重要性を話されていた。また、人が集うためには、地域の行事に参加する人を募ることも大切であり、地域のことを考え積極的に動く人々を巻き込んで、共に歩むことが大切だと感じた。

京都府北部と木津川市が特に熱心で、その他の地域は少し圧倒されているように思った。地域の連携が強いのだと感じた。

(委員)

講演では、子どもたちが主体となっている活動の紹介があり、子どもたち自身に考えさせられるような内容が良いとのことだった。例えば祭りでは子どもが売り手になって大人に声をかける、高齢者サロンでは子どもが工夫して手遊びのボランティアをするというように、子どもを主役に、大人はサポート役に回り、指示待ち人間にしないようにする取組を話されていた。登校時等の見守り隊の活動においては、自分たちの命は自分たちで守れるよう、子ども主体の活動に転換していくような必要性があるのではないかと仰っていた。

持続可能な学校運営協議会のあり方においては、大人が全部やり切る組織では意味がなく、子どもを主体として地域社会で育てる必要があることや、ボランティア活動もどのように自分を高めていけば良いかということ子どもたちとよく話し合うべきとの話だった。また、コミュニティの分類について、自治体や婦人会、PTAなど特定の目標がないコミュニティ、特定の目標がある地域のコミュニティ、地域還元はないが目標を持つコミュニティに分かれるが、目標を持っていると活動が活発だとのことだった。現在、地域コミュニティが崩壊の危機にあると言われるが、テーマコミュニティとコミュニティ・スクールが力を合わせて地域を盛り上げていく必要があるという話が印象的だった。

様々な話を聞いたが、自身も地域の大人として、また小学校の指導員の仕事をしている立場として、すぐに頼ってくる子どもたちに対する関わり方など、納得できる話も多く、学びがあった。自身の生活でも活かしていきたい。

グループワークでは、コミュニティ・スクールについて、形だけの会議を年数回開催することになっていないかという話や、委員を任された側も困っているのではないかという話、行政にも中に入ってもらえないかという話が挙がった。コミュニティ・スクールは良い取組だと皆分かっている一方で、実態が分からない、うまく役割分担がされていないと学校側も大変で現実的には難しい、地域も先生方も知識がない人が多いという具合に、厳しい意見が多く出たように思う。

(委員)

講師はコミュニティ・スクールアドバイザーだったため、やはり行動力があり終始内容に圧倒された。とても多くの事例が紹介され、教科書のような感じだった。

昨日も学校運営協議会があったが、講演を受けて、子どもをお客さんにはできないという話をした。自身も心に留めておきたいと思う。

もう一つ印象的だったのは、講師が紹介していた小6と中3に向けたアンケートの結果である。人の役に立つ人間になりたいかという問いに、95%の子どもたちが人の役に立ちたいと回答していた。これから居場所づくりを進める身としては、子どもたちの思いを大切にしながら熟議を重ねていかなければ、単に集まって終わる場所になってしまう懸念があると感じた。少しずつでも行動を起こしたいと思っているが、この審議会の委員がオブザーバーでもコミュニティ・スクールに関わってもらえたら良いと思う。

グループワークでは、八幡市はまだコミュニティ・スクールが立ち上がっておらず、綾部市は立ち上げようとしているとの話だった。いずれも学校評議員会が横滑り状態とのことで、どの地域でも同じところからのスタートなのだと思う。

(委員)

講師は文部科学省のアドバイザー資格をお持ちで、全国を回られているため知識や事例の量が多く、短時間では聞き切れない内容だった。先ほども話が出たが、横断歩道に立つ大人が旗を持って車を止め、子どもを渡らせていることにより、子どもたちは自分で道を渡れば良いか分からなくなるのではないかと話があった。交代で子どもたちが旗を持ち、お互いに渡れるようにする必要があるとのことだった。コミュニティ・スクールの主要な目標が主体的に考えられる子どもを育てることだが、日本社会では難しいのではないかと感じた。グループワークの中の1人が元小学校長だったが、横断歩道での見守りをなくすと保護者から猛反対されるため、学校として子どもに危険を伴う行動はさせられないと話された。主体的に子どもを育てると言っても、それを容認しない社会を大人がつくってしまっている。その社会を作り変える必要があると感じた。

グループには他に印象的な2人がいた。1人は自ら手を挙げて社会教育委員になった大学4年生で、社会をどうしていくべきかをテーマに卒業論文を書こうとしているとのことだった。中学生の時に自分たちの文化祭を地域に開く必要があると提案し、応援してくれた校長先生と生徒会で、反対する教員を説得した結果、町民を巻き込んだ文化祭が開催できたというエピソードが話された。主体性を育てることに成功した例だと思う。

もう1人は子どもたちにバドミントンの指導をしている女性で、指導をきっかけに女性だけの団体を立ちあげた話をされた。講演の中で、女性が前に出ることがまだまだ難しい社会だとの話があったが、彼女曰く全くそのようなことはないとのことだった。周囲には活発な女性が多く、お互いに好きなように発言して軋轢も起きていないとのこと、どの地域においても率先して声をかける女性がいたらもっと活躍できるだろうとの話だった。

この2人を見て、日本の将来も変わる可能性があると感じた。

(委員長)

それぞれの学びを共有していただくことで、参加していない委員にとっても新たな学びにつながった。

### 3. 協議事項

(事務局)

最初に参考情報として10月21日及び11月18日に開催された、市民協働でつくるまちづくりの拠点ワークショップについて簡単に情報提供した後、生涯学習のあり方について、前回に引き続いて協議いただきたい。

ワークショップは11月18日に最終回を迎え、今後、市長部局において拠点整備に向け取りまとめの作業に入る。市民協働推進拠点到学びの場の機能を持たせるために何が必要か、本日の審議会で意見をいただき、市教委としての考えをまとめて市長部局と連携していく。

(委員長)

前回より生涯学習のあり方について議論いただいているが、終了したワークショップの情報は参考として、今回は公共施設で今後学びの場をどのように確保するかを主眼に置いて議論を進めていきたい。

(事務局)

まずワークショップの情報提供をする。2回目については別途、両面カラー印刷の速報レポート資料を用意しているのでご覧いただきたい。3回目についてはレポートが出来上がっていないため、見学、参加された方からお聞きした内容をもとに報告する。

10月21日に2回目のワークショップが開催された。建築家で東京芸術大学准教授の藤村龍至さんから、自身に関わるまちづくりの実践例についてレクチャーがあった。埼玉県鳩山町にある「鳩山ニュータウン」にある複合拠点施設の指定管理者を務めておられ、施設内のカフェにあるシェアキッチンでは日替わり出店者がランチを提供し、作り手も食べに来るほど好評になった。埼玉県の別の市の公共施設にかかる予算額推移データを見せながら、公共施設は中身を維持しながらいかにダウンサイジングをしていくかの時代に入っていると説明された。

その後、中宇治の新施設の立地と空間を考えるワークショップがあった。1回目とは異なり、学生、子育て・働き手世代、高齢者が混ざった班分けがされ、どのような場所にあると良いか、周辺環境はどうか、どの程度の広さでどのようなサービスがあると良いか等について、菟道ふれあいセンターと宇治公民館跡地のメリットとデメリットを考え合った。各班から出た活動のアイディアは資料の裏面をご覧いただきたい。

11月18日に最終回となる3回目が開かれた。ミユキデザイン代表取締役の末永三樹さんから、自身に関わる岐阜県の柳瀬商店街での取組についてレクチャーがあった。空き店

舗の2階をシェアハウスに、1階をキッチンにして商店街から見えるようにしたところ、通りすがりの人が覗くようになり、朝からラジオ体操をしてモーニングを一緒に食べるという人の集まる空間ができ、地域に暮らす人と商店街の人との関係性を作れたとのことだった。禁止事項を増やさないことが大切だと、今後の拠点へのアドバイスがあった。

その後は、1回目、2回目で出された意見をベースに、活動拠点の運営を考えるワークショップがあった。活発な交流が生まれる持続可能な拠点はどのような主体に運営されると良いか、菟道ふれあいセンターと宇治公民館跡地、それぞれの場所について考えた。一例をあげると、菟道ふれあいセンターでは、立地を生かし多世代が集う多機能複合施設として、保育士が運営する「セカンド保育園」、英語が得意な学生が運営するワールドカフェ、また宇治公民館跡地では人が集まるレジャー施設として、音楽イベントや四季を楽しむ施設、キッチンカーの出店というアイデアが出された。

(委員長)

ワークショップで出された意見から浮かび上がったキーワードについて、後ほど協議いただきたい。

(事務局)

続いて、生涯学習のあり方の協議について説明する。第1回審議会にて配付した資料集を参照いただきたい。

前回の審議会では資料集10ページの、第8期答申のビジョンのまとめを一部抜粋した文章を基に意見をいただいた。

答申では以降のページにおいて、ビジョンを公民館のあり方、生涯学習推進の方向性として認識し、取組を進めていくべきであるとしており、11ページの下段に《これまでの公民館の枠組みにとらわれず、他の公共施設等と柔軟に連携することで生涯学習を推進する》という見出しで、「生涯学習センター以外にも、市内には設置目的は異なるものの、生涯学習ができる施設がある。このことを踏まえ、今後は、全市的な連携・発展の視点で、社会教育法に定める公民館の枠組みにとらわれず、生涯学習のより良い推進方法を検討する必要がある。」と示していただいた。併せて、生涯学習施設が身近にあることが重要であり、生涯学習のための場の数は減らさずに、他の施設との複合化や民間施設等の資源を有効活用すること等も検討すべきであるとする。このことは、「宇治市第5次総合計画」や「宇治市公共施設等総合管理計画」に示されている考え方にも合致しているため、重要な視点と言えるだろう。」と述べていただいた。

答申を基に市教委が作成した「公民館の今後のあり方最終案」においては、資料集22ページのとおり、市教委が考える生涯学習のビジョンとして「これまで本市の生涯学習推進の歴史において積み重ねてきた成果を活かすとともに、必要な生涯学習の場を確保しながら、教育の範疇にとどまらず、地域活動や福祉、防災等他の分野と連携する。」と表明し、公民館の今後のあり方を、「既存の公民館の枠組みにとらわれることなく、幅広い視点で生涯学習の推進を促していく場となる。」としている。

## 第11期宇治市生涯学習審議会 会議録

資料集 36 ページの上部には、公共施設の多目的・多用途化をイメージした図が掲載されている。また、37 ページの「公共施設の将来像」の図では、今後集約化、複合・多機能化していく公共施設の機能の一つに「子どもから高齢者までの幅広い世代が集い、学びを行う場」が含まれている。

これらの点を踏まえ、資料集 36 ページの図のように集約化、複合・多機能化した公共施設が生涯学習の場となることに対する協議をまずお願いしたい。

その後、この間のワークショップで参加者から出された意見・アイデアから浮かび上がったキーワードである「多世代交流」「集いやすさ」という言葉に、学びという視点を加えるとどのような生涯学習を行うと良いか、意見をいただきたい。多世代が交流するために必要な学び、多世代が交流することで生まれる学び、人が集うために必要な学び、人が集うことで生まれる学び、など様々な視点から考えていただけたらと思う。

これらの2点についてご協議願いたい。

(委員長)

意見を伺いたいが、先に欠席委員の意見を事務局からお願いしたい。

(事務局)

本日欠席の委員から意見を頂戴したので、最初にお伝えさせていただきたい。

施設には、目的があって施設が建設されていて、特別な機能を有する類の施設もあるが、その施設や場所というものは、それを使っていく人の思考・発想・行為で形づくられていくものだと思うため、市民参画や住民自治を促すようなソフト面・仕組みづくりに一層力を入れる必要があると感じている、との意見を頂戴した。

(委員長)

生涯学習のあり方を議論するにあたっての前提として、これまでの流れを振り返っていただいた。第8期の答申でも、公民館の枠組みにとらわれずに生涯学習を考えると出しており、教育委員会からも今後の生涯学習のビジョンが示されている。宇治市が多目的・多用途な公共施設を作ろうとする中で、もちろんハードに対する要望もあるだろうが、当審議会で審議すべきはハードがどこにあるべきかではなく、宇治市の生涯学習についてどのような学びがあるべきかということである。不安や懸念点もそれぞれの立場から示していただければ良い。抽象的で議論が難しいところもあるかもしれないが、具体的な各団体や様々な活動の中からのご意見を示していただければと思う。

(委員)

宇治市民でないため、その観点で、自身が関わる他市の事例も情報提供しながら今日の議題について意見したい。

結論から言うと、市長部局の公共施設の将来像と、教育委員会の公民館の今後のあり方については、表現こそ違うものの、大きな方向性には違いがないと思っている。方向性を

融合しながら、落とし込んでいくゴールが望ましい。公民館や社会教育という言葉に愛着を持っている人が多いため、言葉を消さずに上書きするイメージで、建物や機能、仕組みを作ることが求められている。例えば、新しい公民館、新しい社会教育というように、今までの言葉をうまく使いながら説明していくことが大切だと思う。

少し多いが、最近の事例を紹介したい。

1つ目は、兵庫県丹波市の事例である。人口6万人ほどの市だが、自身も委員長として総合計画策定に関わっており、市の将来像がようやく出来上がってきたところである。今回、学びときめく丹波市をスローガンとし、「学び」を前面に押し出した。総合計画としては異例だと思う。ここに生涯学習や地域人材育成の視点を入れている。学びは単に学校教育やコミュニティ・スクールだけで完結することではなく、市民一人一人に関わる言葉だと伝える挑戦をしている。

2つ目は、綾部市の事例である。数日前に、綾部駅から1分の場所に新しい複合施設がオープンした。図書館と子育て施設、200人が入る貸会議室があり、早くも全世代型の居場所として大人気になっている。学生が電車の待ち時間に勉強したり、0歳児から親までが交流していたり、図書館には多世代が来館したりと、立地が良いため集しやすい空間になっている。また、「あやテラス」という名前が良い。市民の公募で決められた名前だが、宇治でも市民が施設の愛称を決めていく仕組みを真似できるのではないかなと思う。

3つ目は、府の丹後教育局の事例である。子育てサポート協議会の仕事をしているが、昨年から高校生全員に対して毎年アンケートを取っている。質問の中心は、この町が好きか、この町に住みたいかの2点である。丹後が好きかについて、高校生の90%、大人（PTA）では100%が好きと回答している。対して、宇治市の2年前の調査では、宇治市に愛着があるかとの質問に対して、平均で58.7%しか愛着があると回答していない。20代未満に限ると46.7%であり、若い世代の愛着が低いことが気になった。新しい施設がこの数字を向上させるきっかけになれば良いと思う。次に、住みたいかどうかについては、丹後の高校生は12.2%という厳しい結果であり、好きではあるものの仕事がないため住み続けられないと考える学生が多い。大人は70%だった。宇治市での調査では、平均66.9%が住みたいと回答している。交通事情も良く住みやすいためだと思うが、逆に3割の方は出ていきたい、もしくはどちらでも良いと思っている。これはもっと高められる数字だと思う。それも含めて、新しい施設が重要な役割を果たすのではないかなと思う。

4つ目は、舞鶴市の事例である。舞鶴市はこれまで同じ目的の建物を東西両方に作ってきた町だった。しかし、予算面や人口減少の影響もあり、新しく建てる図書館は西舞鶴だけに作る決定がされた。東舞鶴の住民の反対はあると思うが、分館方式でカバーする方針が決められ、それをワークショップで非常に丁寧に説明して住民と対話されている。宇治の場合も、今回は中宇治が中心だが、中宇治地域以外の方がそっぽを向かないような配慮について、舞鶴市の説明の方法や地域の繋ぎ方から学ぶべきこともあるだろうと思う。

5つ目は、神戸市の事例である。

神戸市の婦人会館は、婦人会に委託して運営している。全国的には婦人会の解散とも連動して婦人会館が減少し、男女共同参画センターに変わっているが、神戸市は婦人会が強

かったことから、今でも婦人会館と男女共同参画センターの2施設がある。ここでの懸念が、高齢化が進む婦人会の方々がいつまで会館を維持できるかである。今年ヒアリングをした際、婦人しか使えないイメージがあるため、時代の流れに合わせて名前を変えるべきではないかと、考えが融和していた。宇治市ではこの間、公民館という名前が消えることや、社会教育の事業が変わるかもしれないことへの反対があったと思うが、説明をしていく中でしっかりと理解をいただき、時代の変化と共に少しずつ変えていくことが大事だと思う。

最後に、朝来市の事例である。人口3万人ほどの市だが、総合計画の評価において、市民一人一人が、自分がやってみたいことをできたかどうかと、それが自分の幸福感にどう繋がったかを毎年調査している。建物を作って終わりではなく、また入館者数やアンケート調査だけで終わらせるのでもなく、一人一人の宇治市民が、この新しい拠点で行いたいことが行えたか、フォローしていくことが求められていると思う。

「幸せ」「自分の行いたいこと」といったキーワードから、新しい拠点で始められることのワクワク感が伝わると、これまで反対された方とも少しずつ理解し合っていけるのではないかと。伝え方や説明責任、対話の手法を工夫する必要があるが、大きな方向性は変えなくて良いと思う。

(委員)

反対していた方の中心は、従来型の公民館で自分たちの趣味活動をしてこられた方だと思う。公民館自体が時代と共に変化していく必要があり、市として複合型の施設を作ることの説明が足りないと思う。審議会の答申でも「市民の生涯学習を市民と市の協働でつくる」と書かれているが、自らが何かを学ぶ、団体を作って学べる場をつくる、という以前の生涯学習の考え方だけでなく、市民と共に協議して、どのような社会教育活動をする必要があるかをまず明確にしなければならない。様々なものを寄せ集めただけの施設にしないためにも、この「市民と市の協働」をどう動かすか、議論できれば良いと思う。

(委員長)

今まで活動してきた場が消されて無視されるのではないかと不安から反対意見が出ていると思う。審議会ですることとして、どのような意見があり、市民に理解してもらうにはどのようなビジョンを提示すれば良いか、ご提案いただければと思う。実際に各団体でどのような声が上がっているか、また、中宇治地域に限らず、他の地域からも出されている意見等があればお聞かせ願いたい。

(委員)

反対される方は、新しい施設が建っても今までの活動が続けられるのかを非常に不安に感じるとともに、これまでやってきたことが否定されるように感じているのだと思う。公民館に固執しているように感じる。これまで継続されている活動を尊重しながら、新しい公民館、新しい社会教育の視点で考えていくべき時代になっていると思う。

(委員)

社会教育をしているのに活動場所が奪われるという思いが強くなるのだと思う。現在活動している団体の世代は、自分たちのやっている学びだけが社会教育だという固定観念が強く、スポーツも福祉も学びだと言われても受け入れられない。様々な学びの形があることを示してクリアしていかなければ、学びを取られるという思いから抜け出せないように思う。

(委員長)

決して消されるわけではないため、それが伝わるスローガンや新たな言葉が必要だと思う。様々な新しい生涯学習があり、そこに当然これまで活動されている内容が含まれて大切にされるということを伝えていかなければならない。

(委員)

多世代交流や集いやすさに学びの観点を加える点について話をすると、自身は公民館を利用したことがない。30～40代は利用していない方が非常に多いと思う。先ほど話に挙げたあやテラスは、子育て世代の要望に一致している。多世代交流するためには、少なくとも若い世代が集まる必要がある。どうしても公民館と聞くと年配の方が多くイメージがあり、同世代がいなかったために若い世代は行きづらいと思う。

また、仕事が終わった後に何か学びたいと思っても、あまり遅い時間まで開館していないことがある。あやテラスを見ると、夜10時まで開館している。終業後にも立ち寄れるような時間帯で、何かスキルアップができるような習い事があり、さらに内容も複数回にまたがらずに1～2回で完結する単発のものだと気軽に立ち寄れるのではないかと。

時代によってニーズも変わるだろうが、自分の周囲に意見を聞くと、おしゃれな空間や夜も利用できるコワーキングスペース、日中なら地域活性化も含めて交流できるスペースが挙げられた。自身もそういう場だと行ってみたいと思う。

(委員長)

今後集まっていたきたい年代の方の意見は非常に貴重だと思う。これまで利用してこなかった方が生涯学習の学びに参加していくためには非常に重要なキーワードだと感じた。

(委員)

宇治では子育て支援のNPOが力強く活動されており、商業施設や京都文教大学等にスペースを設けている。うまく拠点分けしたような形で、子育て世代が集まる空間ができている。中宇治に多目的・多世代交流施設を作るのであれば、NPOが持つノウハウも取り込まなければもったいないと思う。

ゆめりあうじの中にも子育て支援拠点はありますが、多世代交流を行うには厳しいように思うので、新しい拠点でそのような空間が作れたら良いと思う。

(委員)

立地は非常に大切な要素だと思う。先日雰囲気が良いにも関わらず客が少ない店に入って窓際に座ると、その後続々と客が入ってきた。人がいると人が入ってくるのだと思う。あやテラスのように、通りすがりに何があるのだろうと思わせられると、人が集まってくる。中宇治の場合は「連れてくる」必要がある。また、一度来た人が口コミで仲間を連れてくるのが大切だと思うので、良い活動を行いながら広く知らせていくことを忘れてはならないと思う。

(委員長)

新しい施設で何ができるか、どのような学びがあるのかを広報することは非常に重要だと思う。

(委員)

先日木幡で祭りを開催した。内容は輪投げやコマ回しなど昔ながらの遊びで派手さは全くなかったが、それでも子どもたちは喜んで遊んでくれた。目立つ派手な内容にしなくても、方法によっては人が集まってくれと感じた。遊びの中で学んでもらう、さらに、可能であれば観光客や外国の方にもおもしろそうだな、と覗いてもらえるような施設だと良いと思う。

(委員)

第3回のワークショップを見学したが、年代も性別も様々な30人ほどが意見を出していた。出される意見はおしゃれなカフェを作りたいなど、年齢性別に関係なく同じような内容だった。それはそれで皆が望むことであり、そのような施設にすれば良いと思う。

自身がコミュニティ・スクールに関わっているため力が入ることかもしれないが、今後学校の空き教室は増えていくだろうと思う。サークル活動の場所がないとよく聞くが、学校等の既存施設をうまく活用して生涯学習ができる仕組みを考えられないだろうか。様々な規約もあり、地域差も大きいと思うが、一つずつクリアして行きながら、コミュニティ・スクールとも一緒になって取り組んでいけたら良いと思う。

(委員長)

非常に重要な視点だと思う。審議会で議論すべきは、新施設でどう学ぶかだけではなく、生涯学習がどうあるかということである。今ある公民館や他の場所も含めた形で、宇治市民がどう学んでいくかを考えることが重要である。

(委員)

公民館がなくても学校が利用できると言えたら、地域の人がどれだけ力が出るかということを実感している。

(委員長)

そういう意味でもやはり情報提供は大事である。場所がなくなる不安を抱える方に対し、ここで続けられるとか、こういう続け方があるという情報提供をすることは非常に重要な視点である。

(委員)

市民の意見を聞くことは大切だが、実現の可否も含めてどう反映させたかのフィードバックも大切だと思う。

(委員)

従来の公民館がどのような役割を果たしてきたかは、年配の方しか知らないことだと思う。自身は公民館の利用者ではなく講演に行っていた立場だが、趣味の団体が常に利用しており場所の取り合いになっている印象だった。また、講演会が開催されても文学・歴史に関する内容が多く、そのような学びの場というイメージがついているように思う。今求められているのは、講師を呼んで教えてもらう場だけではなく、主体的に市民が集い、議論ができる場である。子育て世代が子連れで施設を訪れて何を学ぶかという、人が集まり様々な情報が飛び交う中でそんなやり方もあるのか、とお互い気付いていくことであり、偉い人から何かを教えてもらう場が求められているのではないと思う。

(委員長)

市民の声や、審議会で議論している内容がどのように反映させられるか、重要なポイントである。

(委員)

先日、中宇治地域で開催されたまちにわワークショップに参加した。従来のマルシェやイベントは1ヶ所で行われていることが多いが、今回はエリア全体で様々な体験ができるよう工夫されていた。興味の有無にかかわらず、誰もが覗くことができ、選択肢を広げられる場があることがとても良かった。自身も利用者だったが、従来の公民館は、高齢の方のサークル活動が大半だと思うが、個室の中に入ってしまうと、内々では充実して盛り上がっていても、外には刺激を与えられない。オープンスペースで様々な活動が行われていると、視界に入ることによって何かを感じたり体験してみたいと思ったり、様々な気づきがあるように思う。

また、市内でも様々なイベントが企画されているが、なかなかホームページ等で全ての情報をキャッチすることができない。課同士の横の繋がりがあれば、お互いに情報交換ができると思うので、行政内に橋渡しをする人がいれば良いと思う。

市内では様々な活動が行われているが、発表する場が限られている。公民館に所属されている方は公民館まつりで発表できるし、発表しやすいジャンルであれば自ら出ていくこ

ともできるだろうが、そのような団体ばかりではないように思う。活動内容等の情報をうまくCSコーディネーターに繋げられると良いのではないか。例えば、子どもたちの学びの場に活動団体が出張し、子どもたちと一緒に体験や発表ができれば、活動団体にとっても学びを社会に還元できる機会となると思う。うまくコミュニティ・スクールに取り入れていけるような仕組みが作れたら良いと思う。

(委員長)

横の繋がりや情報提供について以前から審議会でも出ている話だが、市全体の学びの情報を一元的に提供できるような部署やコーディネーターを作るなど、情報元があると学びが広がると思う。また、社会への還元は審議会でもキーワードとしているところであり、発表の場があることや、コミュニティ・スクールや学校教育と繋がることで、また新たな学びができる。今までの公民館活動にも繋がると思うため、自らの学びをさらに広げて行ける場になるというイメージを持った。

(委員)

生涯学習概論の授業の中で、学生に公民館を利用したことがあるか尋ねると、数人しか手が挙がらなかった。自身も大学生まで公民館を利用したことはなく、そもそも場所すら知らなかった。用がなければ利用しない施設であり、若い世代に限らず利用したことがない人が多いのが現実である。サークル活動をしている学生にとっても、利用できる場所があると知っているとは便利ではあるが、視界に入らないのだと思う。複合化により、若い世代も含めて多世代が交流できるようになると、別の機能を使うために施設に足を運ぶようになる。例えば図書館は、30～40代になると子どもを連れて行く場所の一つであるが、その時に別の機能の部分の存在も目に入ることによって、のちに必要になった時に使えるようになる。社会教育や生涯学習の様々な機能を持つ施設が市内にあることを認識できることは、多目的化・多用途化することの大きな意義だと思う。基本的に小さな町では愛着があり、市の規模が大きくなるほど存在が知られない施設になりやすい。一番は存在や場所を知ってもらうことが大切である。

ただ、多用途化すると、同じ空間の中で本来の公民館スペースが削られることに反対意見が出るのだと思う。本来は目に入ることで新しく興味を持つ人が増えたり、自分たちの活動に参加する人が増えたりするきっかけになるはずだが、使える部屋が減ると自分たちが活動しづらくなる懸念の方が大きいのだと思う。従来の利用者に不利益がないよう、活動方法や他の活動場所を提案できる体制を作り対応することにより、単にスペースが削られるだけでなく、利益もあることをうまく説明していく必要があるように思う。

(委員長)

従来の公民館利用者にもメリットがあるはずだが、うまく伝わっていない。他の世代が集まるメリットの一方で、現実的にスペースがなくなる不安に対しては、代替案があることの情報提供が不安解消に繋がるのではないかと思う。話題に出ている生涯学習をコーデ

インターネットする人材といった役割は、今後さらに必要になると思う。

大阪府の茨木市では1週間前におにクルという複合施設がオープンした。子育て支援もあり、図書室や多目的室もあり、オープンスペースもあって何が行われているかが見える。市役所の横にあるので様々な人が集まり、すでに大人気になっている。社会に合った形で皆が楽しめるような施設はどのようなものか、審議会でも建設的に学びの形を提案していただければと思う。

(委員)

大学の図書館を見て気が付いたことだが、今の図書館は静かにすべき場所ではなく、集まって皆で議論する場所になりつつある。そのための仕掛けはガラス張りであり、話し声は外へ漏れないが、中で行っていることが見え、中からも書架が見える。中の動きが見えるということは自分たちの宣伝にもなるため、そのようなスペースもぜひ検討してほしい。

(委員長)

学校の空き教室はまさしくオープンスペースで、活動に向いているように思う。

(委員)

やはり図書館には人が集まってくることが重要である。大学図書館においても、理想としては、オープンスペースを用いて、通りすがりに参加していく、連携するところまで繋がっていけば良いと狙っていた。現実的には興味を持って参加するところまではいかず、参加者を集めるには情報提供が必要にはなるが、一方で、活動する人を見ることが自分たちの活動への刺激になることや、活気のある空間を演出するためには人が何をやっているかを見えるようにすることが大切だということには異論がない。以前からファミレスで勉強する人がたくさんいるわけだが、やはり皆がいるところには人が集まってくる。自分たちも何かしようという気運が高まることがオープンスペースの意義である。

(委員)

西宇治体育館では、会議室に空きがある場合貸し出してくれる。たまたま足を運んで知ったが、皆に発信すれば良いように思う。

(委員)

先日紫式部文学賞の受賞式で、角野栄子さんの講演を聞いたが、「魔女の文学館」という図書館のような施設を作る話をされた。自身の子どもは本が好きだといっても、親の読み聞かせが好きなのか、自分で読むことが好きなのかの分類ができていない。角野さんが作った施設は、絵本を著者名で並べるのではなく、並んでいる中から自分で探す仕掛けをしており、読み聞かせもするものの、自分で読む主体的な気持ちを育てるように工夫されているとのことだった。本が好きなのはもちろん、好きでない人も本をきっかけに集まれるのではないかと思った。

## 第11期宇治市生涯学習審議会 会議録

新しい施設で新しい学びをする中の目玉として、本も利用できれば良いと思う。特に宇治は図書館が離れたところにあるイメージがあるため、それが中宇治にある安心感も大切ではないかと思う。

(委員長)

新施設には図書館は入っていないと思うが、図書スペースなど本に触れることができる空間があれば良いと思う。

(委員)

まだ建てられるかも分からない状態で中身の議論をして良いものか疑問に感じている。他の公民館も今後複合化を検討する場合、古くなりつつある施設がそのまま使用できるのか。敷地が狭く駐車場も限られる。一方で、公民館、コミセン、福祉センターなど施設の利用実態は重なってきている。現状では困難だが、市内に集約化した複合施設が何か所かあり、コーディネーターの役割を担う人がいれば良いのではないか。

(委員長)

重要な懸念である。現在は中宇治の施設を中心に話が進められているが、今後他の公民館等にも波及する話であり、他の地域の住民にとっても他人事ではない。市全体の生涯学習がどのように進められるべきか、考えていく必要がある。

(委員)

誰しも変化を嫌うものであり、それがプラスでもマイナスでも、エネルギーがいる。市の施設である以上、より多数の人の幸せを目指す必要がある。今の公民館を幸せに利用している方ももちろんおられるが、より多数という視点からこの議論が出てきたのだろうと思う。年を重ねると新たにできるようになることは数少ないが、それができた時や実感した時に幸せを感じる。それが生涯学習なのだと思う。ただ、1人で感じるだけではまだ幸せではなく、その生涯学習を通して人とどう繋がるかが、一番の幸せに繋がる場所だと思う。資料集9ページに、学びを通して人を繋ぐと書かれているが、その視点からぶれずに議論を進める必要があると思う。

先ほど話題に挙げたあやテラスと宇治市の公民館を比べた時に、一番の違いは大きさであるが、大きさで何が変わるかと考えてみたら、公民館には用事がなければ入れないのに対してあやテラスは用事がなくても誰でも入れる点だと思う。ただ、中宇治で作ろうとしている施設は、匿名で用事がない人も入れる場所ではないのではないかと。名前が分かり、顔が分かり、その中で人の繋がりを作ることが、今後宇治が目指していく新たな学びの場になるのではないかと感じた。

(委員長)

市の施設は、より多数の人の幸せのためにあるということはその通りで、だからこそ複

合施設の流れになっている。一方で、その変化を不安に感じることも事実であり、根本的に反対される方にはメリットが伝わっていないのと思う。

ご意見いただいた内容をまとめると、新しいスローガンや施設の名称という形で、どのような生涯学習の場であるかを示していくことの重要性のご指摘があった。

多世代交流というキーワードで、子育て世代や観光客など、これまで施設を利用していなかった方に対するアプローチとして、オープンスペースにして、人が何かやっているところに集まる仕組みについてご意見をいただいた。また、公民館等で学んできた人たちがさらに学んでいくためにも、またその繋がりを作るためにも、コーディネーターのような存在が必要であることや、空き教室や他の公民館等の活動情報を含めて、市民の学びを一元化して把握できるような情報提供の仕方が必要ではないかという意見が出た。

加えて、学んだことを社会還元していくための発表の場の構築や、コミュニティ・スクール等との連携など、新しい学び方の意見をいただいた。

反対されている方に対しても、これまで積み重ねてきたものを活かすためにどうすれば良いか、審議会が出た意見を基に、生涯学習のあり方を提案していけたら良いと思う。

#### 4. その他

##### ➤ 令和5年度山城地方社会教育研究協議会研修会について

(事務局)

令和6年1月12日(金)、宇治田原町総合文化センターにて、令和5年度山城地方社会教育委員連絡協議会研修会が開催される。先行して出欠の確認をしており、当日分科会での司会を森川委員に、記録を西山委員にご協力いただくこととなった。開催要項は先日メールでお送りしている。参加いただく委員には、日程が近づいた頃に改めて集合時間等をお知らせする。

##### ➤ 令和6年宇治市二十歳のつどいについて

(事務局)

令和6年1月8日(月・祝)に、宇治市文化センター大ホールにて宇治市二十歳のつどいを開催する。今回は1回開催とし、委員の皆様にも出席していただいでの式典となる。当日は13時半開場、14時に第一部の式典を開始する。14時半頃から第二部特別企画が行われる。第二部特別企画は、8月から会議を重ねた二十歳のつどい実行委員会による企画で、当日の司会もすべて実行委員が担う。委員の皆様にも是非とも式典にご出席いただき、二十歳の節目に激励をいただきたい。後日メールで出欠票を送る。

(委員長)

最後に何かお知らせや伝えておきたいことはないか。

(委員長職務代理)

来年2月17日(土)にまなびんぐに出展することになった。これまではリサーチの形

## 第11期宇治市生涯学習審議会 会議録

が大半だったが、今回は趣向を変えて、誰でも座って喋って行けるオープンスペースを作り、感想等を付箋に書いてもらうシステムにしようと考えている。それだけでは人が集められないため、北欧の遊びのモルックをしようと思う。詳細やご協力いただきたいことをメールで送るので、お返事いただければと思う。

### ➤ 次回審議会の日程について

(事務局)

次回審議会については後日日程調整をさせていただきます。

### • 最後に

(委員長職務代理)

今回も活発な議論をいただいた。新しい施設ができる浮かれた気持ちだけでなく、重要な懸念もご指摘いただき、本当に大事な部分も教えていただいた。時代が変わる中で生涯学習のあり方についても一つの形が見えてきたように思う。

明日から師走で寒くなるが、年明け元気にお会いできることを楽しみにしている。